

地域地理科学会 機関誌 投稿規定 (2025 年 1 月改定)

1. 投稿の原則

本誌に掲載される原稿は、地理学・地理教育などに関する理論的・実証的研究成果をまとめたもの等とし、未発表のものに限る。投稿は、原則として地域地理科学会会員に限る。ただし、連名の場合には筆頭著者が本会会員であること。

2. 著作権

すべての著作権は、地域地理科学会に所属する。ただし、著者は、著作が掲載された機関誌発行後に、著者個人又は著者が所属する法人もしくは団体のウェブサイトには著作物を掲載する場合（機関リポジトリへの保存及び公開を含む。）本学会の許諾を得ることなく著作物を利用できるものとする。

3. 原稿の種類

原稿の種類は、論説、展望、調査報告、授業実践報告、フォーラム、地域情報、巡検案内、巡検報告・書評とする。

また、論説、展望、調査報告、フォーラム、巡検案内は、英文で投稿することができる。

論説：その長短にかかわらず、理論的・実証的研究における分析視点、研究方法などにオリジナリティを有するもの。

展望：ある主題に関する既存の研究成果を分析・検討し、研究の現段階および将来展望についてまとめたもの。

調査報告：地理学に関する理論的・実証的な調査報告。

授業実践報告：地理教育・社会科教育・環境教育の授業実践報告。

フォーラム：地理学・地理教育などの諸問題についての議論や問題点を提起したもの。

地域情報：素材の新しい地域の情報。

巡検案内：地理的な視点をふまえた巡検の具体的な実施プランの提案や実施報告。ルートや所要時間が明記されているもの。

巡検報告：実施機関の許可を得たうえで、会員が参加した他学会などの巡検の紹介。

書評：地理学および関連分野についての図書の批評と紹介。

4. 原稿の長さ

図表・要旨などを含む原稿の長さは、刷り上がりページ数で下記の通りとする。

なお、刷り上がり 1 ページは 1,764 字（21 字×42 行×2 段）に相当する。

論説・展望	20 ページ以内
調査報告・授業実践報告・フォーラム・巡検案内	12 ページ以内
地域情報・巡検報告・書評	3 ページ以内

5. 原稿の採否

投稿論文の採否は、論説、展望、調査報告、授業実践報告については、複数の査読者による査読結果を受けて編集委員会が決定する。巡検案内については、一名以上の査読者による査読結果を受けて編集委員会が決定する。その他の原稿の採否については、編集委員会が決定する。

6. 原稿の送付

投稿者は、送付状に必要事項を記入し、原稿とともに地域地理科学会事務局（office@ssrg.jp）に原則として電子メール添付で送付することとする。

7. 著者の負担

原稿が規定の長さを超える場合には、超過分の費用を著者の負担とすることがある。また、カラー印刷等の特殊な印刷を必要とする場合や、編集委員会が必要と判断して業者により図の版下を作成し直した等の場合には、その経費は著者の負担とする。

8. 著者校正

著者校正は初校までとし、再校以降は編集委員会が行う。

9. 別刷

別刷の部数は 50 部を単位とし、その実費は著者の負担とする。

1. 原稿の作成

- 1) **書式**: 原稿は、原則としてワードプロセッサで横書きに作成し、A 4 判用紙に上下左右の余白を約 30mm ずつとり、40 字×22 行で印刷する。
- 2) **構成**: 原稿は、表題・著者名(所属)・本文(および付記)・注・文献・図・表という構成で、執筆要領にしたがって作成し、完全なものとする。
- 3) **要旨・キーワード**: 本文の前に論文の要旨を、論説・展望は 800 字以内、調査報告・フォーラム・授業実践報告は 400 字以内でつける。要旨の最後に論文の内容(分野・対象・方法・地域)を明確に示し、検索語としての一般性を備えたキーワードを 5 つ以内でつける。
- 4) **英語表題・英文要旨**: 地域情報・書評・巡検報告以外にはすべて、英語の表題をつける。論説・展望には、英文要旨を 400 語以内で必ずつける。調査報告・フォーラム・授業実践報告・巡検案内にも 200 語程度の英文要旨をつけることができる。英文要旨の最後に、英語のキーワードを 5 つ以内でつける。英文要旨は、行間を十分にとって、A 4 判用紙の上下左右に 30mm 程度の余白をとり印刷する。英文要旨には、対応する日本語(英文要旨の日本語訳)を必ず添付する。著者の責任において適切な英文要旨を作成すること。なお、採択後に編集委員会にて文法等に関するネイティブチェックを実施する。
- 5) **章節番号**: 章番号にはローマ数字の I.、II.、III.、節番号にはアラビア数字の 1.、2.、3.、項番号には両括弧付き数字の (1)、(2)、(3)、を用いる。
- 6) **文体**: 文章は、とくに必要な場合を除き、常用漢字・新仮名づかい・新送り仮名(例、行う)を用い、「……である。……だ。」調で書く。
- 7) **接続詞・副詞の表記等**: 接続詞や副詞(例 たとえば、および、しかし、なお、すでに、かなり、とくに、きわめて、はなるべくひらがなで書く。動物・植物の名称は、慣用的使用法による。
- 8) **句読点**: 句読点は、「。」「」を用いる。
- 9) **数字・欧文文字の表記**: 数字や欧文文字は、1 字で単独に用いる場合以外には、半角文字を用いる。
- 10) **数字**: 数字は、熟語などの特別な場合を除き、アラビア数字を用い 3 桁ごとにコンマで切る。ただし、大きな数字は、「京、兆、億、万」などの漢字を使ってもよい。分数は、「1/2」とせず、「2 分の 1」と書く。
- 11) **数式**: 数式等の表記は、適切な行数をとり、文字の大小、書体など(例 イタリック体、ギリシャ文字)を明瞭に区別できるようにする。
- 12) **字体**: 印刷に際し、太字(ゴシック体)を用いる場合は、「ゴチ」と赤字を付記した赤の下線を引く。また、欧文の斜字(イタリック)体を用いる場合は、「イタ」と赤字を付記した赤の下線を引く。強調したい語句は、語句の上部に点を打って示し、点を 1 つずつ、赤丸で囲む。ギリシャ文字を用いる場合は、「ギリ」と赤字を付記した赤の下線を引く。
- 13) **年号**: 年号は、原則として西暦を用い、必要に応じてその後に元号などを括弧に入れて、併用することもできる。(例 1585(天正 13) 年、1870(明治 3) 年)
- 14) **単位**: 度量衡の単位は、原則として記号を用いる。(例 km、m²、kg)
- 15) **人名**: 人名は、表題および見出し、本文中の初出、他の人と混同しやすいときの 3 つの場合はフルネームとし、そのほかは姓のみとする。氏名に漢字を用いない外国人名はカタカナで表示し、初出の箇所のみに原綴りを()内に併記する。

2. 注・文献の引用

- 1) 注は本文(および付記)の直後に 1 行あけ、「注」として通し番号順にまとめて記す。
- 2) 注は本文中の該当箇所の右肩に、片括弧をつけた番号を 1)、2)、のように付け、その番号は論文全体の通し番号とする。
- 3) 文献表示のみを目的とする注記は避け、次のように文献を文中に引用表記する。

本文中の文献の引用の表記の例

- ① 引用文献の著者が 1 人の場合著者の姓(西暦出版年、引用ページ[必ずしもつける必要はない])

《例》石原（1995、p.170）によれば……、／中島（1998a、1999）によれば…、／…である（篠原、1998）。／…である（坂本、1978、p.85）。／これらの研究（Symons、1987；加藤、1995）によると、…

- ② 引用文献の著者が2人の場合著者の姓・著者の姓（西暦出版年、引用ページ〔必ずしもつける必要はない〕）

《例》田林・菊地（2000a、p.72）によれば……、／ノートン・リーズ（Norton and Rees、1980）は、…

- ③ 引用文献の著者が3人以上の場合

著者の姓ほか（西暦出版年、引用ページ〔必ずしもつける必要はない〕）／外国人の姓 et al.（西暦出版年）

《例》藤本ほか（1995）、は…／秋村ほか（1996、p.77）によれば、…／キングほか（King, R. et al.、1984）によれば、…

- 4) ウェブサイトは本文中に引用表記せず、注において次のように引用表記する。

ページタイトル. URL（西暦検索年月日検索）

《例》岡山市の産業・経済. <http://www.city.okayama.okayama.jp/keizai/index.htm>（2002 年 2 月 14 日検索）

3. 文献表

- 1) 文献は、本文・図表ならびに注で引用したもののすべてを、本文末（注の後）に、「文献」として一括して表示する。文献は、日本人（漢字を用いる外国人を含む）を著者名の五十音順に、次いで、外国人をアルファベット順に配列する。

- 2) 年鑑・統計書・新聞記事・ウェブサイトなどの史資料は文献表に記載せず、必要箇所の注（図表の脚注も含む）として史資料名・発行年・記事掲載年月日などの書誌情報を示す。ただし、雑誌文献に準じた新聞記事で、著者名・表題・ページ数が特定できるものは文献表に記載できる。

- 3) 同一著者で同一年次に複数の文献がある場合には、発行年の後に a、b、… をつけて区別する。

- 4) 文献表での表記例（各項目の区切りの記号：, . などに十分留意すること）

- ① 和文の単行本の場合

著者（西暦出版年）：『書名』出版社、総ページ数 p.

《例》篠原重則（2000）：『観光開発と山村振興の課題』古今書院、222p.

- ② 外国文の単行本の場合

著者（西暦出版年）：書名（斜字体）. 出版社、出版社の所在地、総ページ数 p.

《例》Grigg, D. (1982) : *The Dynamics of Agricultural Change*. Hutchinson, London, 260p.

- ③ 翻訳書の場合

著者著、訳者訳（訳書の西暦出版年）：『書名』出版社、訳書の総ページ数 p. 著者（西暦出版年）：書名（斜字体）. 出版社、出版社の所在地.

《例》ノックス、P. 著、小長谷一之訳（1993）：『都市社会地理学（上）』地人書房、306p.

Knox, P. (1982) : *Urban Social Geography an introduction*. Longman Scientific & Technical, Harlow.

- ④ 和文の編集（監修）書の一部である場合

著者（西暦出版年）：論文名. 編集（監修）者名編（監修）：『編集（監修）書名』出版社、pp. 掲載ページ.

《例》浮田典良（2000）：グリーンツーリズムと地域住民生活. 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編『新しい観光と地域社会』古今書院、pp. 63-72.

- ⑤ 外国文の編集書の一部である場合

著者（西暦出版年）：論文名. 編集者（ed.）〔編集者が複数の場合は（eds.）〕：編集書名（斜字体）. 出版社、出版社の所在地、pp. 掲載ページ.

《例》Hilliard, S. B. (1990) : Plantations and the Moulding of the Southern Landscape. Conzen, M. P. (ed.) : *The Making of the American Landscape*. Routledge, New York, pp. 104-126.

- ⑥ 和文雑誌の一部である場合

著者（西暦出版年）：論文名. 雑誌名 巻数（号数）, pp. 掲載ページ.

《例》由比濱省吾（1992）：岡山県児島湖の環境問題．瀬戸内地理，1，pp.5-24.

⑦ 外国文雑誌の一部である場合

著者（西暦出版年）：論文名．雑誌名（斜字体），巻数（号数），pp. 掲載ページ.

《例》Zakrzewska, B. (1967) : Trends and Methods in Landform Geography. *Ann. Ass. Amer. Geogr.*, 57, pp. 128-165.

⑧ 外国文雑誌の翻訳である場合

著者著，訳者訳（訳書の西暦出版年）：論文名．雑誌名，巻数（号数），pp. 掲載ページ．著者（西暦出版年）：論文名．雑誌名（斜字体），巻数（号数），pp. 掲載ページ.

《例》ハーヴェイ，D. 著，堤研二訳（1997）：空間と時間の間で—地理学的想像力に関する省察，空間・社会・地理思想，2，pp.54-78. Harvey, D. (1990) : Between space and time : Reflections on the geographical imagination. *Ass. Ass. Amer. Geogr.*, 80, pp. 418-434.

4. 図表

- 1) 図表は、本文とは別に1図表で1枚となるよう作成する。写真も図として扱う。
- 2) 図表は、第1図、第1表というように、それぞれ、通し番号をつけて表記する。また、図表の挿入箇所を本文原稿の欄外右側に、赤字で明記する。
- 3) 図表のタイトルは、図は下部、表は上部に示す。また、資料の注記は図表の下に示す。図表の作成にあたっては、資料の年次・凡例・縦軸と横軸の説明・単位・縮尺などを忘れずに記入する。資料などの出典表記は、図表の下に示す。
- 4) 図表の幅は、刷り上がりで横1段（約7cm）、または2段（約14cm）を原則とし、各図表に、刷り上がりの大きさ、または縮小率を明記する。
- 5) 図はそのまま製版可能な鮮明で完全な原図とする。明瞭な版下を作成するために図は刷り上りの大きさの1.5～2倍程度に作成することが望ましい。作図にあたっては縮小率なども十分考慮して作成する。とくに図表中の文字の大きさ・線の太さに留意すること。また、微細な紋様や薄いアミカケは明瞭に印刷できないことがある。
- 6) 図の印刷に際してやむをえず写真植字が必要な場合、文字や数字は、鉛筆で記入する。また、写真植字の実費を著者負担とすることがある。
- 7) 表は過大なものとならないように特に注意する。表の縦罫は左右の両端の罫を除去し、横罫は最上段の罫のみ中細罫（太めの罫）を、ほかはオモテ罫（細目の罫）を用い、中間の罫は縦横ともできる限りつけないようにする。